

岐阜県旧徳山村におけるアクセント様相と交通状況との関係性

—ネットワーク分析を用いたアクセント分布と交通状況の類似性の算出—

小野原 彩香

同志社大学大学院 文化情報学研究科 文化情報学専攻

言語現象とは、ポイントデータであり、仮にポイント同士の情報に相関が見られたとしても、それは偶然による一致であるのか、何らかのコミュニケーションの成立による一致なのかを知ることは困難である。そこで、本研究では、ポイントデータ同士をつなぐエッジの情報を言語外現実[1]である交通状況のデータに求めるとともに、ネットワーク分析を用いて両者の定量的な関係性を探った。

Relationship of accents aspect and traffic situation in Former Tokuyama District, Gifu Prefecture

-Calculation of the similarity of accents distribution and a traffic situation, using network analysis-

Onohara Ayaka

Culture and Information Science

Doshisha University

Language phenomena are point data, and even if correlation is looked at by the information on points, it will be difficult to get to know whether it is coincidence according whether it is the coincidence depended by chance to formation of a certain communication.

So, in this study, while getting the data of the traffic situation which is “extra linguistic reality” [1] for the information on the edge which connects point data, quantitative relationship of both them was explored using network analysis.

1. はじめに

言語の地域差が基本的に地理的距離に支配されることは言語地理学において暗黙の前提だったが、その前提を定量的に説明したものに井上[2]の論考がある。井上は、言語現象と交通状況の関係について述べており、鉄道距離が標準語形使用率と密接な関係を示すことを示した。

井上が言及したのは標準語形の東日本、西日本への段階的な広がり方といったマクロなスケールからのものである。

そこで、本研究では、ミクロなスケールで言語現象と交通状況との関係性を捉えることを目的に、数理的アプローチからそれらを定量的に表現し、両者の関係性を探った。

2. 対象地域と先行研究

岐阜県旧徳山村は、揖斐川の上流域に位置する村であり、徳山ダム建設に伴い1985年に全集落が離村した。当地にはかつて8つの集落が存在し(図-1)、このうち戸入、塚集落については、方言研究の観点において特異的な様相を示すことが明らかとなっている[3][4]。野村[5]の論文にある杉戸の報告によると、戸入は乙種の

(東京式)ではあるが、語(類)によって甲種(京阪式)なアクセントの型との間のゆれをもつか、甲種型で現れる。塚はA式(生田[6]の用語、東京京阪の折衷)よりさらに乙種に近いアクセントである。本郷、櫛原、門入は互いにほぼ同じアクセントを行い、概略甲種に属させ得るが、語によってゆれ、乙種の型を行う場合が無いとはいえない(表-1)。

野村はこの論考の中で、音韻、アクセント、語彙についての報告を行った上で、「徳山村戸入の言語は、現在地(古くは、更に上流の入谷の地に於いてだったであろうか)に成立して以来何回ともなく中央—京都、或いは古くは奈良の言語より改新の波を被っているものと推定される多重層語的な方言である。が又、この方言それ自体として内部より独自の変化を起こしている」と結語を述べている。

この報告を受けて、山口[7][8]は、戸入が古風を温存し、塚が本郷などの影響で変化したとした。山口の報告を受けて上野[9]は、戸入方言は、二音節名詞までの範囲では、内輪式(いわゆる京阪式)の第三次アクセントであるが、平進式(いわゆる非低起式)の他に、近隣方言(V)の上昇式(いわゆる低起式)アクセントに対応する

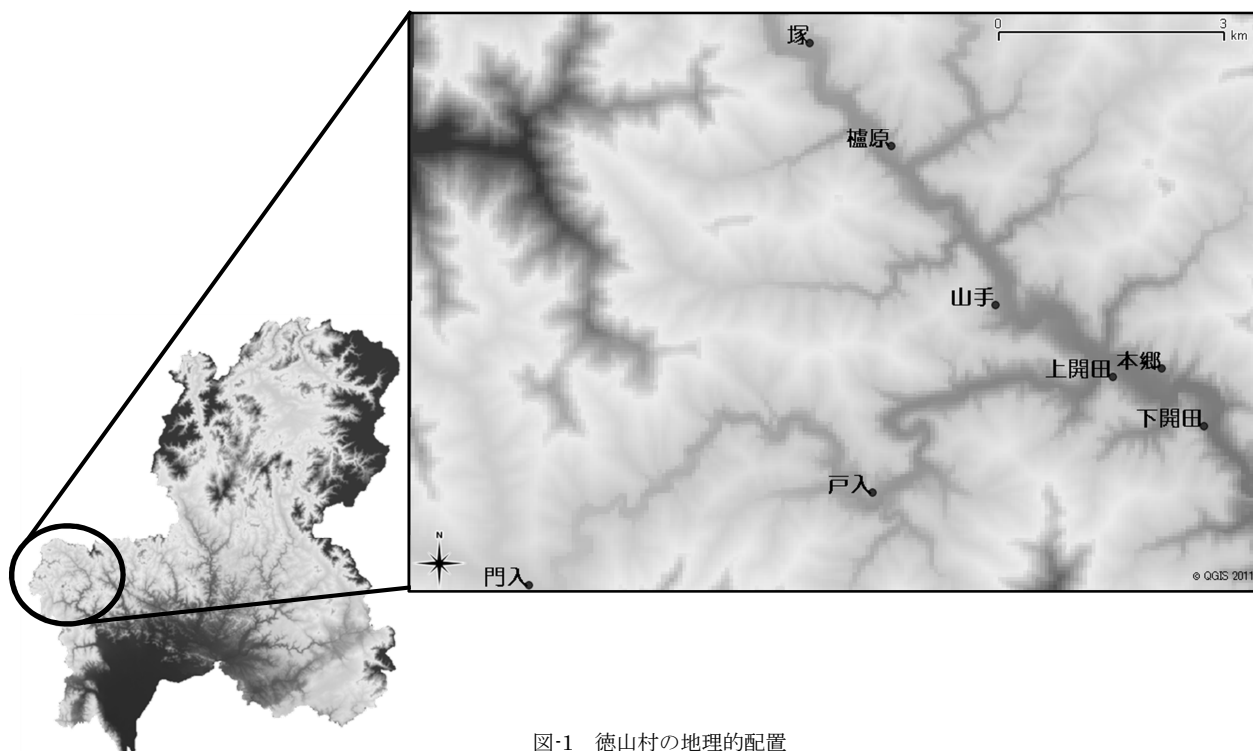


図-1 徳山村の地理的配置

表-1 名詞(+助詞)アクセントの型(老年層)
(門入、樋原は本郷で示す) ※野村[1]からそのまま抜粋

拍数品類	語例	本郷	塚	戸入
一 拍 名詞	1 柄・蚊・血	●▼●~●▼○	●▼●~●●	●●~○●
	2 葉・目・矢	●▼○	○●~●▼○	●●
	3 目・手・火	●▼○~○▼●	○●~●▼○	○●
二 拍 名詞	1 鮎・酒・鼻	●●●	●●●	○●●~●●●
	2 蟬・石・音	○●○	○●○~○●○	○●○~●●○
	3 山・花・足	○●○	○●○	○●○
	4 舟・海・糸	○●○~○●●	○●○~○●●	○●○~○●○
	5 雨・秋・鮎	○●○~○●○	○●○~○●○	○●○~○●○
三 拍 名詞	1 魚・煙・形	●●●●	●●●●	○●●●~●●○○
	2 小豆・毛拔	●●○○	●●○○	○●○○~○●○○
	3 小麦・力・サザエ	○●○○~●○○○	○●○○~●○○○	○●○○~○●○○
	4 鏡・刀・頭	○●○○~●○○○	○●○○~●○○○	○●○○~
	5 辰・朝日・命	○●○○○	○●○○○	○●○○○~●○○○
	6 雀・兎・背中	○●○○○~○●○○○	○●○○○~○●○○○	○●○○○~○●○○○
	7 兜・葉・苺	○●○○○~○●○○○	○●○○○~○●○○○	○●○○○~●○○○

・格助詞「が」を後接させた場合を示してある。●、▼が高拍、○が低拍。▼は一拍名詞が長音化された場合の第2拍。

「くぼみ式」を有しており、二つの式の段階でとどまっているとした。さらに、太田、井上[10][11]は語彙についての報告を行い、井上[11]は、語彙面からも戸入の特殊性が計量的手法によって抽出できたことを明らかにした。基礎語彙に関しては、山田による報告[12]が詳しく、徳山村の基礎語彙は、東京、京都との共通率の間に有意と言える差は無く、ほぼ両者の中間にあるとしている。

いずれの報告の中でも戸入の特殊性について言及があり、なおかつ、戸入の特殊性はアクセ

ントだけに限られるものではなく、音韻、語彙面にもその特殊性が見受けられる。

図-1は、徳山村の岐阜県下での位置関係と徳山村の各集落の位置関係を示した図である。塚—樋原—山手—本郷—上開田—下開田は揖斐川流域に位置しており、戸入—門入は揖斐川の支流沿いにある集落である。この図を見ても明らかのように、戸入は隣接する集落から離れており、また、村外と直接の交流が可能な道も整備されていない。この状況が、言語にどれだけの影響を与えていたのか、次項以降で定量的に評価を行っていく。

3. 分析対象

言語に影響を与えたであろう徳山村の交通状況については、近世、近代、現代に分けてその変遷を追う必要があるが、本研究では特に、近世の誠照寺の巡回路[13]に関する分析を行った。この交通状況を採用した理由はいくつかある。

まず、徳山村において宗教に対する意識が高く、宗教儀式に割く歳出割合も高いことが民俗資料緊急調査報告書における記述[13]で判明している。このことから、宗教が比較的生活の中心的役割を担っており、必然的に言語現象との関連がある可能性を考えた。

次に、交通「量」に関しては時代によって変化することはあるが、特に山に遮られたような山間の交通「網」に関しては通行可能な場所が必然的に限定される。このため、比較的広範囲

表-3 集落間の言語的距離

	本郷その他	塚	戸入
本郷その他	0.113248	0.259615	0.474579
塚	0.259615	0.240385	0.392548
戸入	0.474579	0.392548	0.240451

表-4 集落間の地理的距離(式(1))と言語的距離

交通路のある地点の組み合わせ		式(1)	言語的距離 (Gower's Dist.)
本郷	上開田	658	0.113
下開田	本郷	951	0.113
塚	樋原	1742	0.260
山手	本郷	2365	0.113
樋原	山手	2516	0.113
上開田	戸入	3541	0.475
戸入	門入	4709	0.475

くなればなるほどエッジが太くなるよう重み付けを行っている。

村落内に関しては、物理的に通行可能な道路は巡回路における該当部分の交通網と一致する。すなわち、徳山村の集落同士の行き来は、図-2で示したエッジ以外には無いということである。

これらの結果から、戸入は地理的にも言語的にも隣接する集落から相対的に遠く、塚は地理的には集落の端に存在するものの言語的距離では戸入と他集落との中間に位置することが分かる。

6. 考察

以上の結果は、井上[11]の論考内にて言及されていた「他集落にくらべての交通上の不便さ」を示す戸入集落の地理的孤立性と杉戸によって報告された戸入、塚、その他の集落におけるアクセントの様相を定量的に評価した結果である。情報を数値に縮約しても、戸入、塚、本郷のアクセント様相の違いを示すことができた。

小野原[15]では、上記の巡回路ネットワークに対して媒介中心性を求め、塚、上開田、戸入は、相対的に媒介中心性が低いという結果が得られており、中でも特に戸入の媒介中心性は低く、情報の伝達があまりない地点であることが分かっている。

ネットワーク分析で判明した、戸入が隣接する集落から地理的に孤立すること、戸入の媒介中心性の低さおよび近世から戸入集落が存在するという事実は、戸入の乙種(東京式)アクセントは周りの甲種(京阪式)アクセントより古いことを示す可能性がある。これは、周りの集落が、さらに南や滋賀県東部の甲種アクセント地域からの影響を受けて変化する中で、他集落から離れており、交通路の通過地点でもな

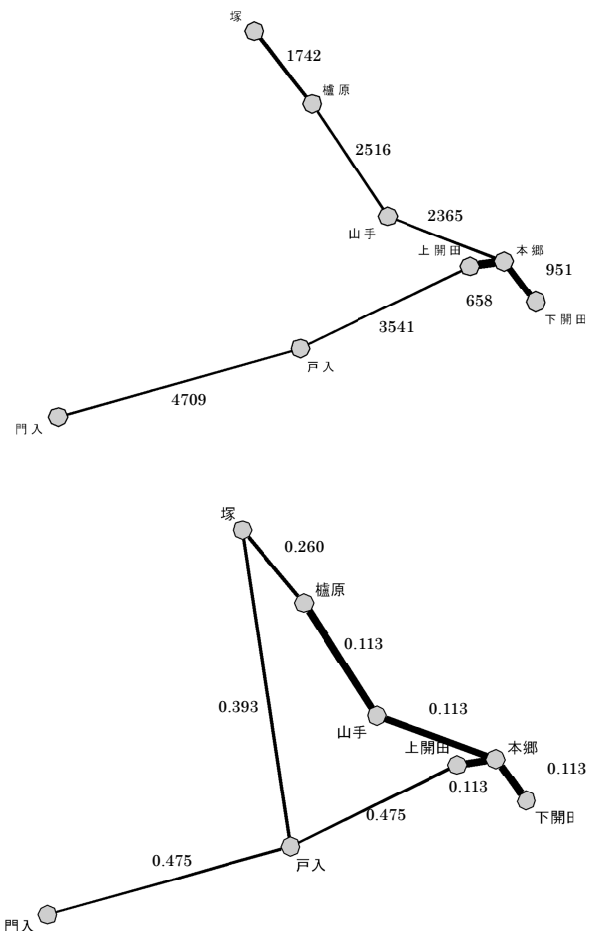


図-4 言語的距離に基づくネットワーク図(上、戸入・塚間以外は地理的に隣接する集落のみエッジを示してある。)と交通状況に基づくネットワーク図(下)

かった戸入のみがそれらの影響を受けなかったと仮定すれば辻褄が合う。また、ネットワーク分析の結果から、塚は北側の峠を超えるまでには距離があり、媒介中心性も低く、徳山村の北の果てであることが分かる。このことから、塚のA式アクセントは、元々乙種であったところに、上開田、本郷から新しく甲種が遡上し、出来上がった可能性がある。戸入の西の門入が甲種であるのは、さらに西側の道を抜けた先にある坂内村と婚姻関係を結ぶことが多かったことが分かっており、そちらからの流入である可能性が高い。さらに、樋原、山手、本郷、上開田、下開田がその地理的な距離に関わらず、言語的な距離で同値を示すのは、地理的要因以外の働き、例えば交通量によるものと推測され、その要因の抽出は今後の課題としたい。

以上、ネットワーク分析を受けての考察は、野村[5]や山口[7][8]、井上[11]がその論文で言及した言語伝播の方向について、地理的側面から傍証を行ったものである。野村の報告中にて

語彙で古い言い回しが残っているという点もこの流入の方向を支持する。また、計量的手法を適用した井上[11]でも戸入の特殊性が語彙面に出ている。ただ、アクセントと語彙にどこまで連動性があるのかということと変化の方向については検討の余地があるため、その点、注意が必要である。

馬瀬[16]がその論考中で集団移住による孤立言語の例を示している。戸入に関しても行き来のにくい場所をあえて選択し、そこに移住したという可能性を考えたが、移住に関する史料というのは残っていない。また、近世から集落があり、僧侶が巡回していたのなら、移住による言語差保存の可能性は小さいと考えられ、野村[5]の言及にもあるように、集落内部の長期にわたる自律的变化の違いと考えるのが妥当である。

戸入から東西両方向にある集落へ行くのに4~5km程度あるが、一般的に人間は1時間に5km歩くことができ、標高が600m上がるごとにそこに1時間加える[17]。各集落間の高低差は戸入一上開田間で約100mが最高値であるため、標高差はそれほど考える必要はない。戸入とそれに隣接する集落間の距離がこの範囲内に収まるにも関わらず、言語が孤立している点は注目すべきところである。

7. 今後の課題

本研究では、近世のみをネットワーク化したのが、交通路における人や物の移動の有無は時間の経過に伴って変化する。このため、近代、現代に分けてその変遷を追い、言語伝播の様相を具体的に言語外の要素との結びつきの中で探っていく必要がある。徳山村の北や東の地域との交通網については今回の巡回路からある程度判明したが、西や南の交通網についても復元する必要がある。また、今回用いた巡回路に入っていない集落の存在と交流の有無についても調べる必要がある。さらに、巡回路における各地点の人口データがあれば、ネットワークの中心性にも変化が及ぶ。

また、今回、ネットワークの重みとして用いたのは、ノード間の単純な直線距離のみという交通「網」自体と言語との関係であったが、物の移動や人の移動といった交通「量」も言語変化に関係すると考えられる。このため、それらの内どの要素が言語変化と結びつくのかについて分析を行う必要がある。

そして、いわゆる乙種、甲種の単純な対立ではなく、拍ごと種ごとまたは音節ごとに両者の特徴が入り混じるのが方言の通常の様態である

ため、それらの細かい変化と変化の方向に注目することが今後、必要になると思われる。

8. おわりに

本研究の対象地域徳山村における言語現象は、言語内変化に関する分析もその周辺地域を含めて未だ研究の余地がある一方で、言語外現実の働きについても整理する必要がある、言語内現実、言語外現実双方の観点から言語生態を捉えていく必要がある。

一般的に言語は自律性を持つと言われている宮岡[1]。しかしながら、言語がその他の文化現象に及ぼす影響、またはその逆はどの程度でどの範囲であるかを知することは、言語体系が明らかでない過去の集落の文化様相や交易の様相を復元することの一助となると考えられる。

参考文献

- [1]宮岡伯人 編: 言語人類学を学ぶ人のために, 世界思想社, 1996.
- [2]井上史雄: 標準語形普及の3段階 鉄道距離と4クラスター別標準語形使用率, 言語研究 126, 日本言語学会, pp.39-67, 2004.
- [3]奥村三雄: 西濃揖斐地方の言語, 揖斐川上流域総合学術調査報告書—岐阜県文化財調査報告書 第3輯一, pp.29-42, 1962.
- [4]真野久: 西濃方言のアクセント——アクセント境界地域の型の認定——, 三重県方言 21, pp.22-32, 1966.
- [5]野村正良: 岐阜県揖斐郡徳山村戸入方言の記述的報告及び成立過程に就いての二三の考察——付アクセントの分布と変遷——, 名古屋大学文学部研究論集 70, pp.3-17, 1977.
- [6]生田早苗: 近畿アクセント圏境界の諸アクセントについて, 寺川喜四男, 金田一春彦, 稲垣正幸共編, 国語アクセント論叢, 法政大学出版局, pp.97-187, 1951.
- [7]山口幸洋: 岐阜県下のアクセント(3), 名古屋・方言研究会会報 6, pp.14-26, 1989.
- [8]山口幸洋: 岐阜県下のアクセント(4), 名古屋・方言研究会会報 7, pp.13-34, 1990.
- [9]上野善道: 日本本土諸方言アクセントの系譜と分布 (2), 日本学士院紀要 42(1), pp.15-70, 1987.
- [10]太田有多子: 揖斐郡徳山村 8 集落間の語の共通度 付加一坂内村での調査資料, 名古屋・方言研究会会報 3, pp.27-40, 1986.
- [11]井上史雄; 太田有多子: 方言の地域差・個人差の多変量解析 岐阜県徳山村, 計量国語学 17-2, pp.49-63, 1989.
- [12]山田達也: 揖斐川上流域における基礎語彙について, 名古屋市立大学教養部紀要人文社会研究 22, pp.33-66, 1978.
- [13]岐阜県教育委員会: 徳山: 昭和 47 年度民俗資料緊急調査報告書, 大島暁雄, 松崎憲三, 宮本袈裟雄 編, 東海の民俗/静岡県編 岐阜県編 [復刻版](日本民俗調査報告書集成), 三一書房, 1973.
- [14]Gower, J. C.: A general coefficient of similarity and some of its properties, Biometrics 27, 857-874, 1971.
- [15]小野原彩香: 岐阜県旧徳山村における言語動態についての空間的検討(2), 学生・若手 地理空間情報フォーラム in 関西 若手技術者・研究者のための技術研究発表会 2011 年度大会論文集 (電子媒体), 2011.
- [16]馬瀬良雄: 移住と言語, 文化受容とその展開, 信州大学人文学部, pp.123-133, 1985.
- [17]Naismith's Rule ,http://en.wikipedia.org/wiki/Naismith's_Rule, (2011 年 11 月 3 日閲覧) .